

●高澤良一 第六句集 燕音

●七月―九月

行々子田夫野人の唄うたふ

葭切の伝法口調に大分慣れ

青胡桃この木とことん優しき木

海陸に鈍器打ちつけはたた神

房総産鮑槽ふねよりひっぺがす

湯河原保養所の庭木のみかん花盛り

道東行シートベルトかちやりと締めて夏空へ

七夕竹搭乗手続カウンターに

七夕の水平飛行に入る空路

七夕の空を降り来て女満別

灼けほてる土にどすんとランディング

サロマ湖の空冷え来たり武者りんどう

えいおうと咲き出てエゾノヨロイグサ

武者りんどうこそぞりこそぞりて砂州に咲く

エゾニューアマニューみんな似ていてどれがどれ

アマニューと断ずるこゑも自信なげ

素足となり踏んづけてみぬオカヒジキ

入日急大傘持の太茎に

オホーツク渚を滑りをる荒布

青鷺がここにもオホーツク晴天

ご当地の赤蝦夷蟬といふを聴く

青鷺の子こつ子こに翔べと湖の風

北辺の日の未だ高く浜苦菜

オホーツク風いでだんまり縞蒿雀

浜苦菜ほろりと風に動く砂

エゾニユウのポンポン咲ける岬なり
夏草のウナギツカミといふを引く
置物のごとき青鷺置く干潟
羅臼町海猫は女めごゑを曳き曳きて
熊ノ湯に入るも一興若葉どき
はまなすも目つむる砂州の砂つかぜ
オホーツクブルーに夏の海無辺
これより夏砂州を舞台の花宴
はまなすに空気小流れつくりけり
寝冷腹抱へて槽ふねの狼おおかみ魚うすもの
おおかみうお黒の羅うすものはおりけり
市涼し買い手のつかぬおおかみうお
夕焼けの終の光の水平線
かしゃかしゃと番屋近くに鳴く虫も
光苔見ゆかと問へば「それとなく」
流木と別の白さのシロヨモギ
弘法芝弘法麦の族やからにて
棒立ちの大傘持に沖時化て
馬鈴薯の花曇日を好みけり
海霧抜けてフォッグランプは黄菅色
羅臼沖背黒鷗に海霧去来
国後島あとかたもなく海霧の中
魔がさしたやうに海霧湧きまだ引かず
水槽のホタテでんぐり返る夏
斜里町はサーモン色の夕焼けに
ドロの木より空蝉剥がしやりにけり
森若葉してセンニユウの高調子

蝦夷大葉子青空に花穂さし入れて

テラスのさき露のジャパニーズ・ローズかな
ハマナスに別名あれば

鉄路伸ぶ限り群落ゼンテイカ

青鷺の嘴を預けし砂州の天

一輪の影の揺れづめ浜苦菜

蝦夷鹿のきよとんとせるに出逢ひけり

残雪の引つ掻き傷めく羅臼岳

逃水の直路ビートの照り返し

止まらんと瑠璃糸とんぼ間合詰め

糸とんぼ止まる所が判りけり

生ビール内地の人よと云はれ酌む

落刈のごそつかせゐる羅臼落

山の落なればしつかり灰汁抜けと

北辺の日を余すなくハマナスに

太陽の三時の色の麦畑

この丘の麦のツー・トーン・カラーかな

麦畑継ぎ目なく風送るなり

大旋風つむじ生まるることも麦畑

榎松の根方にひよっこり銀龍草

滝音の呪縛振り切り来たりけり

押し迫る青嶺や羆棲息地

逃水や斜里岳とろけ出しにけり

遠郭公うたたねの耳開きけり

宝石函羽田上空ぶちまけしごと夜涼の灯

神輿昇く掛声くたびれてはならず

山車獅子の晴れ着の唐草模様も古り

朝顔の大輪清水湛ふごと

かははぎの顔を迂闊に造物主
半島のかぼちやの花のロッパ
夏草や俳壇に撒く除草剤
衣食足り何の平成俳句哉
ブリュールゲルのビア樽男ビール酌む
交し飲むビールの琥珀胃の琥珀
茶天ちやびろうど鷲絨かなぶんひっくり返りけり
翡翠の眼力疑ひなかりけり
皮剥は天下の珍味火を熾せ
たとふれば男の美学冷索麵
田村草風は二手に岐れゆく
偏見はすこぶるつよし車前草村
男氣の廢れたる世の羽抜鳥
定年の一年前の立泳ぎ
玉堂の昔の川の夏の音
独活の花無駄と思へば全て無駄
真夏夜フジコ・ヘミングの黒鍵叩きつける指
百日紅盛りなりいざ極楽寺
土用浪一つ大きくいさな勇魚いろ
土用浪うねりそこねるものあらず
海めくれ出して生まるる土用浪
美食家の齒音涼しうモモスズメ
夏空が救ひのやうにある日なり
雌日芝は引き雄日芝は引っこ抜く
昨日より暑くなるぞと朝の蟬
浮世絵太田記念美術館
髑髏圖も弱冷房裡国芳展
国芳の肉筆美人門涼み

幕末絵師国芳ひろく怪奇の涼

振りかざすだんびら涼し怪猫圖

大名行列白狐にたぶらかされゐる圖

シベリアが叩き込む黒埋葬圖
香月泰男 涅槃

黒き顔黒き手眠るツンドラに

ツンドラの軍隊毛布を抜け靈魂

函を負ふ黒きフォルムは運ぶ人

吾亦紅ミロの構図を想ひをり
高峰温泉

谷地渡る風に白シャツはためかせ

蕾む百合こづいて籠ノ登山の風
かこ と

風混める大谷地をゆく松虫草

木道に人影を見ず松虫草

だまなして霧の走れりゼンテイカ

霧冷えの肩に落ちくる縦雫

九階草霧淡くなり淡くなり

松虫草霧来る方を知れるなり

霧浴びし山の蜻蛉の羽根使ひ

吊鐘人參聞きをり霧の私語
さよめこと

地ビールにステーキ木目の顯てる卓

白雨のごとログコテツジのバーベキュー

牛蒡サラダに軽井沢風コッペパン
レイモンドペイネ美術館

カンバスに避暑地の風も描き込めり

避暑便りペイネのポストカードかな

ポタージュを蜂嗅ぎつけぬカフェテラス

ハイカラな日傘と出合ふ軽井沢

風通るテラスにて。ピザ避暑家族

風通り鯉の洗臉を待つ座敷
佐久

蟬の穴程の寂しさなどといふ
枝々の明るさ増せり白雨中
真夏夜の知らぬが仏不整脈
昼餉共にして夏瘦の弟よ
布袋草きゅつとくびれるところかな
蟹のいふ事情とやらを聞きやらむ
くらげ文様六文銭に相似たり
京劇に呑み込まれをり日の盛り
晚涼の黒の勝ちたる斑ぶちの猫
割り込んでここぞと鳴ける油蟬
夕蟬にやうやう見ゆる鳴き疲れ
じり貧といふ鳴き方をせる蟬も
花火の傘爛れかつをのえぼしかな
炭酸のはじけるやうに閉ず花火
昼寝して腕むっちり如来肌
あめんぼう飛ばし過ぎなり乗り上げぬ
午からは頭も霞む夏期講座
がりがりと妻が自家製氷水
大型絵本覗き込む子の瞳の涼し
モンスタ甲子園ー生まるゝ夏の甲子園
三振を喫す唇鹹き夏
日盛りの中軸打線火を噴きぬ
もくもくと投げるエースにあきつ殖ゆ
常夏の島で鍛えしサウスポー
甲子園グランドを馳す大夕立
日焼せし腕ものいふホームラン
汗っかき太っちょ監督サイン出す

炎天を味方につけぬ勝投手
決勝の壁と峯雲峙てり
戦う汗涙となりぬ夕栄に
西日中バックホームの残像も
必殺を目論む妻の蠅叩
蠅叩湯呑巻き添え喰ひにけり
衣被できればごめんこうむりたい
ぬるま湯に浸りて雨降りお月さん
首尾問へばまづまづの出来松手入
小粒なる葡萄摘むに千手欲し
梅落葉散るにまかせて始末せず
葉蘭の蠅居場所を二転三転す
人間が単純になる湯に夜長
柿渋のやうな評言貰ひけり
露の日の顔の輪郭思はるる
扁平になりて千切れぬ芋の露
震災忌い聞かす婆無^のうなりて
秋津島颱風窺う頃となり
花火果て闇抱え込む雄物川
鶏頭の頭の塵払ふ雨来たり
この水^{みず}気^け頬^ほつぺた落^おつちさうな桃
刀豆の天麩羅といふごわつけり
遊^{清浄光寺}行^(遊行寺)寺^{薄念仏会}のすすき光沢持ち始む
薄は穂に清浄光佛在す寺
薄念^{*鏡縁は時宗固有の内陣の板の間で極楽の池を象徴的にあらわす}仏^{*賦算はお札くばりのこと「南無阿弥陀仏決定六十万人」}唱^ふや鏡縁澄むほとり
お上人手^ずから賦算念仏会
艶ありて甕の薄も念仏も

白芙蓉（によよ）如常住のほとけなり

花すすき（じゅっぼう）十方衆生の願ありて

藤沢山野（とうだくさん）ぶだうに色のり初めぬ

足わろき上人さんの庭踊

花すすき揺るゝがごとくおねんぶつ

念仏と薄と踊る一遍と

上人の虫音のごときおねんぶつ

水面（月岡芳年 月百姿展）の月槍の寶藏院覗く

仲麻呂のまなざし凜と月の海

大門（芝神明宮 だらだら祭（生姜祭））は目と鼻のさき生姜市

かはたれの芝に廻りて生姜市

道思（瀬谷 徳善寺 萩を見る会）い出しながらゆく萩の寺

白芙蓉見ながら体調どうと問ふ

無常迅速生死事大と萩咲けり

多羅葉の青き実善根積めとこそ

萩叢も萩見る会も旺んにて

知己に逢ふごときやすけさ萩を見る

白萩の楚々たるを寄せ掃き給ふ

鋭さを内に押さえつ青すすき

月半までお向いさんの芙蓉咲く

一段と空深くなり葉鶏頭

覚め際に一つ伸びせり保己一忌

読みかけの書に目を通す秋の雨

通院日またぞろ扇子取り出して

風船かづらぼんやりと日を過ごしをり

長崎（おくんち）くんちくんちと鉦囃す

シーボルト（万屋町 潮吹き鯨）挿し絵に遺す鯨曳

おくんちのカラクリ鯨潮を吹く

小鯨の前曳祭の子がわーい

繰り出すは屋台鯨の親爺舟

祭足袋ばたばた御朱印船を曳く

印度人の傘持御朱印船上に

日本の秋一見の遠眼鏡

阿蘭陀万才手書きの髭も爽やかに

あっぱれの阿蘭陀万才秋天下

飲みしやぶる爽やか赤ちゃんあくびする

養生のその後は如何に枇杷の花

木瓜の実に小馬鹿にされてゐるごとし

犬の名と猫の名ゆかりの糸のこ草

英名は緑の狐のしっぽ草

上背のあればやアキノキリン草

生酔いの箸運びけり柿膾

見栄坊の烏瓜照る村はづれ